

編集後記

『真実心』第二十六集をお届けします。平成十六年度、新入生対象の学長講話、および宗教講座の計五編が収められています。

皆さんは本学で仏教を学ばれ、宗教講座なども聴かれたわけですが、今日、何かと世間を騒がしている宗教を見直すきっかけになったでしょうか。そこで、今一度、宗教とは何かを『ナグハマデイ文書』から引用してみましよう。

自己を知らない人は何も知らないことと同じだ。しかし、自己を認識した人は同時に存在の奥義を知ることになる。

宗教とは自己認識を通して、人間をも含む存在の奥義を知ることであって、その逆ではありません。例えば、われわれは自己を知らなくとも、世に知られる識者や学者ともなり得るが、自己について無知であることは、ただ自己を知らないという一事にとどまるだけではなく、人間にとって、それは根本的な無知(根本無明)を表してい

ます。禅の思想家・鈴木正三もまた次のように言います。

己をかえりみて、己を知れ。たとえ学文(学問)をひろくしていかにほど物を知りたりとも、己を知らずば、物知りたるにあらず。

「己をかえりみて、己を知れ」という命題は、宗教が自己認識の問題であることを端的に示す例ですが(ついでに言えば、デルポイの神殿に掲げられた「汝、自らを知れ」も同じ文脈にそって言われたものです)、彼もまた、学問をどれだけ深く究めようとも、あなたが自己自身を知らないとしたら、あなたは無知以外の何でもない、と言います。

ここには、いわゆる学問というもの人間にとってどの程度のものであり、たとえ学問に一生を捧げ、名なり功を成し遂げたとしても、あなたはこの生を無駄に使い果たし、無知のままこの世を去ることにもなるのです。他ならぬこの無知(無明)こそ宗教がいつの時代も糾してきた第一の関心事であつたのです。

最後になりましたが、ご講話をお願いしました先生方には、ご多用の中、原稿にお目通しいただいたことを厚く御礼申し上げます。なお、本文の文責はひとえに編集委

頁にあることをお断りしておきます。

(編集委員)